

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第14号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
所在地：〒690-8504
島根県松江市西川津町 1060
島根大学法文学部 宮澤研究室
発行：2021年 6月 12日

【 研 究 小 論 】

震災と記憶と樹木

宮澤文雄（島根大学法文学部）

東日本大震災から10年が経ちました。「もう10年」「まだ10年」と、そのことをめぐる思いは様々でしょう。震災で犠牲になった方々について警察庁と復興庁はこれまで、死者15,899人、行方不明者2,526人、震災関連死3,739人と発表しています。現在でもその人数は変化し、行方不明者の捜索も行われています。被災地は見た目にはずいぶん復興が進んでいるように思いますが、しかしいっぽうで、あの日のことを抱えて生きる人のなかではいまだ震災は続いています。また、あのとき日本中が失語体験をしたことを思えば、こうも言えるかもしれません。たとえ直接的な被害がなくとも、あの日を通じて苦しみや悲しみを憶えた人々はみな被災者であると。

「生きたる記念碑」

あの日、わたしは宮城県仙台市にいました。島根に住み始めたのはそれから数年後のことです。こちらに来てまもなく、巨大津波に耐え抜いた「奇跡の一本松」の後継樹が、出雲大社に奉納されたと知りました。ご存知の方も多いと思いますが、その苗木はもともと、岩手県陸前高田市で造園業を営む男性が、生き残った一本松の枝を接ぎ木して育てたものでした。そのうちの一本が、『アンパンマン』の作者やなせたかしによって、「ケナゲ」と名づけられました。力のよわい者が困難に立ち向かっていくさまを「健気」といいますから、とてもよい名をもらったと思います。出雲大社の松の木が立ちならぶ参道のわきに植樹されたようですが、わたしは見つけられずにいました。しばらくして、ケナゲは植樹から一年も経たないうちに枯死していたことがわかりました。原因は、同年10月に発生した台風18号の影響といわれています。

石碑と比べて自然環境に左右されやすく、植えた

後も保護を必要とする記念樹は、脆い記念碑です。それでも人が記念に樹木を植え続けるのは、それが「生きているもの」だからでしょう。日本の記念植樹の歴史を詳らかにした岡本貴久子によれば、記念樹とは「林学博士本多静六に言を借りれば、『生きたる記念碑』であり、立派に育て上げるのも枯死させてしまうのも、それを植栽した者の記念すべき事柄への思いと自然環境とに委ねられている」（20）といえます。つまり、いのちある記念樹は、記念すべきことへのわたしたちの心がけを、その成り様を通して常に問いかけてくるのです。いわば、記念樹は植えた者たちのいまの姿を映し出す鏡なのです。

このような人と記念樹のつながり、とくに人と共に生きるという点において、やはり樹木は様々なモニュメントのなかでも特別です。「奇跡の一本松」ももとは高田松原七万本のうちの一本に過ぎませんでした。しかし震災に遭った後、唯一生き残った松の木に、人は希望を見出し、「奇跡の一本松」と名づけて保護（のちに保存）し、後継樹を育てました。世界が壊れてしまったときでさえ希望が見出せたのは、過酷な環境のなかでも生きようとする樹木に、いまの自分たちを重ねることができたからです。この樹木との連帯を通じて、すなわち樹木を思いながら偲ぶことによって、わたしたちは思いや記憶に生きやすくなるのかもしれません。

もちろん、ここでわたしは、ケナゲの枯死を批判したいのではありません。手厚い保護を受けてもお枯れてしまったケナゲは、記念樹が「生きたる記念碑」であることを、いのちを賭してわたしたちに教えてくれました。見事な一生でした。ケナゲの記憶は、会えなかったから余計に、わたしの心のなかで強く根づいています。

ハーンと樹木

ラフカディオ・ハーンも樹木を深く愛した人でした。ハーンが瘤寺や西大久保の老樹の伐採にひどく動揺し、わが身を切りつけられたように心を痛めたことは、妻セツの『思い出の記』をはじめ長男一雄や親友雨森信成の証言がよく伝えてきたことです。

またハーンの樹木への関心は、私生活にとどまらず、文学活動にも広く認めることができます。思いっただけでも「東洋第一日目」「杵築」「日本海の浜

辺で「伯耆から隠岐へ」「博多にて」の紀行文、「十六桜」「乳母桜」「青柳のはなし」の再話文学、そして東大講義「詩歌のなかの樹の精」など、様々なジャンルにそれを見出せるでしょう。

さらに来日以前にさかのぼると、日本時代とは異なる樹木観が見られます。とくに『仏領西インド諸島の二年間』(*Two Years in the French West Indies*, 1890) 所収の「真夏の熱帯紀行」(“A Midsummer Trip to the Tropics”)では、熱帯の森林は「不気味で恐ろしい美 (a weird and awful beauty)」(53)であり「畏怖の念 (the sense of awe)」(55)を呼び起こすといえます。そして、このような自然を前にすると「人間は虫けらになった気がする——冷酷無残な敵におびえる虫けらのような恐怖を感じる

(Man feels here like an insect,—fears like an insect on the alert for merciless enemies)」(56)とあり、ハーンは飼い馴らすどころか反対に飲み込まれてしまうような超自然的な妖力を樹木に捉えます。そして同書の「ラ・ギアブレス」(“La Guiablesse”)の書き出しには、「北の国では樹木はたんなる樹木でしかない。ところが熱帯の樹木になると、人格があらわれる。漠然とした人相とでもいうような、定義しがたい自我を持っている。それは、個人であり、生きたる存在なのだ (In the North a tree is simply a tree;—here it is a personality that makes itself felt; it has a vague physiognomy, an indefinable *Me*: it is an Individual (with a capital I); it is a Being (with a capital B))」(184)とあるように、ここではほとんど人間に近づいています。樹木に超自然的な力や人格を洞察するアメリカ時代の樹木観には、人と樹霊の交感を描いた日本時代のそれとの連続性が認められます。ただしハーンは、日本時代を通じて恐るべき魔性を秘めた存在から人に寄り添う霊性を宿した存在へと認識を深めたようです。

ほかにも「日本の庭で」や「草ひばり」などに登場する草花や虫や鳥のように、ハーンは樹木以外にも多種多様なものに特別な関心を払ってきました。様々な生き物がそのゴーストリーな音色をふるわせ響かせながら共生するハーンの文学世界は、まるであらゆる声が混交し響き合う森林のようであり、自他が通い合うことを通して声は歌として聴こえてくるようです。多様な存在に連続性と関係性を見出すハーンの交感的な文学性は〈うたう文学〉と呼んでもいいかもしれません。もちろん、ここに死者や精霊や妖怪の超自然的な響きを包摂してこそ、〈ハーンの森〉が完成することは言うまでもありません。

「あみだ寺の比丘尼」を誤読する

ところで、この文章を書きながら、わたしはあることに気づきました。今回、震災と記憶と樹木についてわたしが書こうとしていたことは、『心』(Kokoro, 1896) 所収の「あみだ寺の比丘尼」(“The

Nun of the Temple of Amida”)という作品にすでに書かれていたことに思い当たったのです。

「あみだ寺の比丘尼」は、家族を失ったお豊と呼ばれる女性が尼僧になる話です。稲妻が閃くように愛する夫と幼いわが子を亡くしたお豊は、思い出に苦しむあまり死者を呼び寄せる儀式に手をだし、また深い悲しみゆえに小さなものに執着するうちに自らも小さくなってしまいます。そして尼僧になると、境内で小さな子どもたちと遊ぶことが生活となり、子どもたちが親になると今度はその子どもたちと遊ぶ、というように幾世代にもわたって子どもたちと戯れながら生涯を終えます。

愛する者を突然失ったお豊の悲しみやもう一度だけ会いたいと願う気持ちは、震災遺族の方々のそれと重なります。人前ではにこやかに振舞うことができて、ふと湧き上がる思い出の前では力が抜け、故人を思わずにはいられません。心に深い傷を負ったお豊がトラウマを抱えてしまったことは明らかです。無自覚のうちに小さいものを偏愛するようになったのもそのためでしょう。

物語は尼僧になったお豊が子どもたちとの遊戯を生きがいにしている様子を描きますが、しかしそのことが彼女の心の傷を治したとは思いません。お豊の傷は、痛みが一時的に和らぐことはあっても、治癒できるものではないからです。とはいえ、物語が何らかの回復に向かおうとしているのは確かです。ただし、それはお豊の傷が癒えて塞がれていくのではなく、その傷がお豊をある新しい関係に拓いていくという意味での回復です。具体的にいえば、お豊は「比丘尼さん (the Bikuni-San)」として、その土地に生きる人々の記憶や様々ないのちをつなぐかけがえのない存在になるということです。

「比丘尼さん」となったお豊が亡くなる直前の段落を見てみましょう。そこでは「比丘尼さん」の振舞いを通して、あるイメージが浮かび上がってくるように思います。

The people took good heed that she should not know want. There was always given to her more than she needed for herself. So she was able to be nearly as kind to the children as she wished, and to feed extravagantly certain small animals. Birds nested in her temple, and ate from her hand, and learned not to perch upon the heads of the Buddhas. (Kokoro 85-86)

まわりの人たちは、比丘尼さんが不自由しないようにと何かにつけて気を配ってくれました。いつも一人では十分過ぎるほどの喜捨がありました。それで彼女は、望むままの親切を子どもたちにしてあげることができ、また小さな動物たちにもたっぷり餌をあげることができました。小鳥たちは彼女の寺に巣をつくり、彼女の手から餌をもらいました。それに、仏様の

頭にのっけてはいけないことも習いました。

様々な生き物が「比丘尼さん」のもとに集合し生育する様子は、無数のいのちを宿す樹木を彷彿とさせます。むろん、ただの樹木ではありません。共同体から手厚く保護されたお返しとばかりに、自らも生きとし生けるものを迎え入れ、蓄えた力を惜しみなく分け与えてやり、この世界がどのようにできているかを教えさす「比丘尼さん」は、寺社の境内に屹立する聖なる巨樹そのものです。大きな悲しみを負った一人の女性が長大な時間のうちに共同体の記憶や様々ないのちをつなぐ存在へと変容していく「あみだ寺の比丘尼」という作品を、わたしは人が樹になる物語として誤読します。そして、ケアされる者からケアする者へとお豊の存在を反転させていく共同体の歓待と包容を描いた本作を、震災被災者と社会がその後の困難を共に生きていく可能性を探った物語として誤読します。

時を重ねて読むこと

震災やコロナ禍に見舞われた現代は、再び多くの死と痛みと悲しみを経験することになりました。しかしそれゆえに、死者や前世の記憶と出会い続けることを描いたハーンとわたしたちはつながりやすい距離にあると思います。「あみだ寺の比丘尼」のわたしの読み方が正読から外れていくのもこのためです。わたしたちの「なぜ、どうして」にはなかなか答えは見つかりません。しかしハーンのテキストは、わたしたちの問いかけにいつまでも付き合ってくれます。つまり、時を重ねて読むことを迎え入れてくれるのです。そしてそれは、現代という文脈のなかでハーンが新しい光彩を放つ瞬間にわたしたちが立ち会うということでもあります。わたしにとってハーンを読み継ぐ理由はこんなところにあります。

いずれにしましても、「あみだ寺の比丘尼」をまだ読まれていない方はぜひお読みください。そして、いつか松江にお越しくださる機会がありましたら、お豊が幼いわが子と一緒に登って夫の帰りを願ったという嵩山（だけさん）にもご来山ください。

引用文献

Hearn, Lafcadio. *Kokoro: Hints and Echoes of Japanese Inner Life*. Houghton Mifflin, 1896.

——. *Two Years in the French West Indies*. Harper & Brothers, 1890.

岡本貴久子『記念植樹と日本近代——林学者本多静六の思想と事績——』思文閣出版, 2016.



嵩山を望む 写真撮影：横山純子

【 書 評 】

『ラフカディオ・ハーン 西田千太郎 往復書簡』 についての少考

会長 吉川 進

この書の書評二篇（注）は、ハーンと西田との間の心情、思いやり、情報の交換などを巧みに指摘し、さらに優れた注釈にも触れてあり、立派な書評である。

本稿では、翻訳文の文体について考えてみたい。本文を読み始めて気づいたのは文章が流暢でなくやや硬い印象である。冒頭の「訳者のことば」には「ハーンの手紙を読んでみると、本人がペンを走らせながら、途中で急に浮かんだ思いをその場に挿入してからその先を書き進めたものが目に付く。そのような文の語順を変えての文法的に整理した滑らかな日本文を作ることよりも、ハーンの感情の動きをできる限り忠実に伝えるように、原文の語順に添うように心がけた。」とある。まさにその通りであり、文章の流れに慣れてくるにつれて、その呼吸に引き込まれ、読後に従来にない大切な体験を深く味わう思いがした。

今、二十数年前の教室風景を思い出す。三行ほどの英文の訳を試みたが、1人の学生が私の訳文に納得がいかず何度も試訳を要求した。「英語の内容を理解するためには、英文は書いてある通りに、左から右に上から下に英語を辿ればよい。例えば、こんな具合に。

I went to the park to see the cherry blossoms with my sister.

（私は公園へ行った。桜の花を見るために、姉と共に。）

同時通訳は同じ考え方で、次々と繰り出される相手の英語を追いかけてながら日本語にする。つまり相手の英語を follow していく。英語を学ぶとはこのような訓練をすることです。君の要求は完全に出来上がった日本語表現を求めている。それでは時間がかかり過ぎます」。ざっとこんな応答であった。

この度の「往復書簡」を、絵画作成にたとえるならば、普通一般の「滑らかな」訳文は、結果として、すっきりと一筆で描かれた美しい色彩、あるいは墨絵のような平面的な日本画であり、これに対して「常松訳」は絵具を継ぎ足しながら塗り重ねて描く立体感のある西洋絵画である。

訳書は原文に書かれた感情の流れ、思考の組み立てをできるだけ忠実に日本語に移し替える大胆な試みであり、翻訳一般の在り方に一つの方向性を示している画期的な業績である。

なお、訳者の年齢は現在九十歳であるが、この度の翻訳作業には約三年を要したとのことである。氏の学問への情熱と精力は我々若き英学徒がぜひ見習い学ばねばならぬことである。

終わりに、欲深い話であるが、この書簡の原文(英文)の発行が切に望まれる。

(注) 常松正雄訳、村松真吾編 『ラフカディオ・ハーン西田千太郎往復書簡』
(島根大学ラフカディオ・ハーン研究会ニュースレター第13号 高橋栄)
(島根日日新聞令和3年2月26日付、元島根大学法文学部教授 酒井董美)

「耳なし芳一」における笑い

事務局長 横山 純子

『怪談』(*Kwaidan*)の冒頭の作品「耳なし芳一」(“The Story of Mimi-Nashi-Hōichi”)を読んで疑問に思ったことがある。夜寺を抜け出した芳一を探していた寺男達は、阿弥陀寺の墓地の平家の墓の前で芳一が琵琶を弾いているのを発見して、芳一を寺に連れ帰ろうとするが、芳一は応じようとせずに、“To interrupt me in such a manner, before this august assembly, will not be tolerated.” (*Kwaidan*, 14)と芳一が言うと、寺男達は、“Whereat, in spite of the weirdness of the thing, the servants could not help laughing” (15)と、回りには鬼火が飛んでいる恐ろしい光景なのに笑わずにはいられないのはなぜだろうか。(原話「琵琶秘曲泣幽霊」は「芳一声をひそめ御前なるぞみだりに来り給ふべからずと制す衆僧大に笑ひて」と直接には恐ろしい様と対比をしていない。)寺男たちには鬼火しか見えず、目の見えない芳一が聴覚等で感じている異界の世界は見えない。異界の世界はそもそも目に見えないものだからである。緊迫した状況だからこそ、このギャップがなおさら可笑しかったのだろう。この笑いは最初の異界の不気味さを乗り越えて滑稽なものとしてパロディー化している。この笑いは、高木大幹が『小泉八雲の面影』の「ハーンの笑いについて」の中で取り上げている『日本雑録』(*Japanese Miscellany*)所収の「海のほとり」(“Beside the Sea”)の笑いとは少し似ている。それは“After the uncanny solemnity of the rite, the outburst of merriment was startling” (*Japanese Miscellany*, 265-6)とハーンが「海のほとり」で描写し、高木が「人為的な厳粛さと全く自然に出る子供たちの明るい笑い」の「コントラストの価値を捉えたもの」(『日本の面影』192)と述べる対照的な笑い。

「耳なし芳一」における対照的な笑いは、まるで不気味な異界を恐れる必要はなく、異界は身近であるとユーモラスに示しているようだ。実際、異界は芳一の住んでいる寺の墓地で、間近な世界である。古東哲明は『他界からのまなざし』で、日本人の他界観は、「他界をこの世の間近に想定」する「近傍他界観」(『他界からのまなざし』13)であると述べている。ハーンは対照的に笑いを提示することによって、異界が間近でこの世を裏打ちしていると表現しようとしたのかもしれない。

参考文献

Hearn, Lafcadio. *Kwaidan*. Rutland, Vermont & Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1971.
古東哲明『他界からのまなざし 臨生の思想』東京：講談社, 2005.
高木大幹『日本の面影』東京：東京図書出版会, 2004.
一夕散人「琵琶秘曲泣幽霊」『臥遊奇談』巻2, 1782.

【 読書会 の 記 録 】

事務局長 横山 純子

第131回例会

2020年12月12日14:00~16:00 読書会
松江市国際交流会館第2研修室 参加8名
“My Guardian Angel”17.31-22.20.

第132回例会

2021年1月12日14:00~16:00 読書会
松江市国際交流会館第2研修室 参加9名
“My Guardian Angel”22.21-25.28.

第133回例会

2021年2月13日14:00~16:00 読書会
松江市国際交流会館第2研修室 参加11名
“Idolatry”26.6-28.14.

第134回例会

2021年3月13日13:00~15:00 読書会
松江市国際交流会館第2研修室 参加12名
“Idolatry”28.15-30.7.

第135回例会

2021年4月17日13:00~15:00 読書会
松江市国際交流会館第2研修室 参加10名
“Idolatry” & “The Dream of a Summer Day”28.15-30.7, 5.6-7.7.

第136回例会

2021年5月15日13:00~15:00 読書会
松江市国際交流会館第2・第3研修室 参加14名
“The Dream of a Summer Day”7.7-12-14.

編集後記： 三人の方々から御寄稿をいただき大変喜びました。お忙しい中ご協力を賜りこころから感謝申し上げます。
(高橋栄)
